

# 『方丈記』後半部試論(三) —— 「三界八只心一ツナリ」を中心に ——

芝波田 好弘

はじめに

『方丈記』後半部は、前半部最後に記された「イカナル業ヲシテカ、暫シモ此ノ身ヲ宿シ、タマユラモ心ヲ休ムベキ。」を受け、方丈の庵での仏道修行について記されおり、「夫、三界八只心一ツナリ。」で始まる段落で締め括られる。「夫、三界八只心一ツナリ。」は、都に代表される俗世に対し、庵の正当性を述べる根拠と見られている。本稿では、便宜上「夫、三界八只心一ツナリ。」より「住マズシテ誰カ悟ラム。」までを、後半部まとめ、と称する。

「三界八只心一ツナリ」の出典については、古注の『首書鴨長明方丈記』と『鴨長明方丈記抄』が「三界唯一心 心外無別法」を挙げているが、出典は記されていない。『方丈記』、『鴨長明方丈記諺解』、『方丈記流水抄』は「三界唯一

心々外無別法」心仏及衆生是三無差別」(如心偈)を挙げ、『華嚴經』を出典として提示した。『方丈記宜春抄』は、『華嚴經』を出典として「三界唯一心」を挙げる。「三界唯一心」も「三界唯一心 心外無別法」も、如心偈を省略したものと思われるが、現段階での断定は避ける。

古注おける「三界八只心一ツナリ」の出典を『華嚴經』に求めるという傾向は、明治以降も引き継がれて行くが、この三種の文言(「三界唯一心」、「三界唯一心 心外無別法」、如心偈)は、四十巻本、六十巻本、八十巻本のいずれの『華嚴經』にも見出すことは出来ない<sup>3)</sup>。この点については、『織田仏教大辞典』(「三界唯一心」の項)が

【術語】 古来華嚴經の偈として「三界唯一心。心外無別法」。心仏及衆生。是三無差別」と云ひ習へども此經中にこの成語あるにあらず。【八十華嚴經三十七卷十地品】に「三界所有唯一心」【六十華嚴經十卷夜摩

天宮菩薩説偈品」に「心如<sup>二</sup>工画師<sup>一</sup>。画<sup>三</sup>種種五陰<sup>一</sup>一切世界中。無<sup>二</sup>法而不<sup>レ</sup>造。如<sup>レ</sup>心仏亦然。如<sup>レ</sup>仏衆生然。心及衆生。是三無<sup>三</sup>差別<sup>一</sup>。」此の二所の文を取りて一經の主意を頌せしもの。誰の創作なるを知らず。恵心の【自行略記】に「夫三界唯一心。心外無別法。心仏及衆生。是三無差別。」是れ其の初にや。(以下、略。太字は筆者に依る。以下、同。)<sup>4</sup>

と、指摘するところである。  
本稿は、「三界ハ只心一ツナリ」の出典と後半部まともで顕現する執着の問題について、少しく考察を試みるものである。

なお、筆者は、『方丈記』に登場する「余(我)」という人物は、作者を雛型として創作された作品主人公と考えている。<sup>5</sup>

## 一、「三界ハ只心一ツナリ」の出典について

先に記した六冊の古注以降の「三界ハ只心一ツナリ」の出典については、以下の如く三十に分類することができた。

### A群

#### I、「三界只一心」を指摘するもの

「偈」とするもの。

アテネ文庫『方丈記』(著者・冨倉徳次郎 1984 弘文

堂)

#### II、「三界唯一心」を指摘するもの

i 『華嚴経』夜摩天宮品とするもの。

『文法詳解 方丈記詳解』(著者・尾崎暢殃 1955 加藤中道館)

ii 『華嚴経』とするもの。

『解釈と評論 方丈記』(著作者・松浦貞俊 1957 開文社)

iii 『華嚴経』の偈と云い伝えられて来たとするもの。

新日本古典文学大系『方丈記・徒然草』(校注者・佐竹昭広 1989 岩波書店)

iv 仏教語とするもの。

『方丈記』無常観の特異性―往生要集とのかかわりから―(陳靖国 1989 2 『学大国文』)

v 仏教でいう、とするもの。

笠間注釈叢刊『方丈記全釈』(著者・武田孝 1995 笠間書院)

vi 『華嚴経』に依拠する偈とするもの。

『方丈記』の移動する草庵(岡山高博 2007 11 『国語国文』)

vii 『華嚴経』十地品とするもの。

ちくま学芸文庫『方丈記』(校訂者・浅見和彦 2011

III、「三界唯一心 心外無別法」を指摘するもの

i 『華嚴経』とするもの。

- 『方丈記捷解』(著作者・井上善文 1904 三協合資会社)・『方丈記評釈』(著者・中嶋幹事 1977 共益商社書店)・校註 日本文学大系「土佐日記 蜻蛉日記 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 東関紀行 十六夜日記 清少納言枕草子 方丈記 方丈記(彰考館本) 徒然草」(195 国民図書株式会社)・『詳註方丈記・発心集』(著者・次田潤 1952 明治書院)・学燈文庫『方丈記・無名抄・無名草子』(著者・峯村文人 1955 学燈社)・日本古典評釈・全注釈叢書『方丈記全注釈』(著作者・築瀬一雄 191 角川書店)・日本古典文学全集『方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』(校注・訳者・神田秀夫 191 小学館)・『方丈記全釈』(著者・水原一 195 加藤中道館)・『校注 方丈記』(編者・永積安明 1978 武蔵野書院)・新編日本古典文学全集『方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』(校注・訳者・神田秀夫 195 小学館)
- ii 『十地論』とするもの。
- 『新釈方丈記精解』(著作者・吉川秀雄 1917 精文館)・日本古典鑑賞講座『徒然草・方丈記』(編者・富

iii 『華嚴経』の偈とするもの。

- 解釈文法シリーズ『方丈記の解釈と文法』(著者・土田知雄・安藤英方 1955 明治書院)
- iv 『華嚴経』の要約とするもの。
- 日本古典文学大系『方丈記 徒然草』(校注者・西尾

v 実 197 岩波書店)

v 出典を指摘しないもの。

- 『方丈記新考』(著者・草部了内 1970 初音書房)
- vi 『華嚴のいわゆる』とするもの。
- 『二人の長明——『方丈記』から『発心集』へ——』

- 『山田昭全 1973 3 「国文学踏査」・山田昭全著作集 第六卷「長明・無住・虎関」(203 おうふう)に収載。』

IV、「三界唯一心 心外無別法」心仏及衆生 是三無

差別」(如心偈)を指摘するもの

i 『華嚴経』とするもの。

- 『訂正 標註方丈記』(標註者・上田胤比古 1922 誠之堂)・『方丈記講義』(講述・今泉定介 1922 誠之堂)・新撰百科全書『方丈記読本 附 註解』(著者・篠田真道 1909 修学堂)・『方丈記通解』(選註者・有馬与藤次 1910 崇文館)・二松堂)・『全釈詳解 方丈記新講』(編者・金光英夫 1930 立川書店)・『方丈記』(著作者・

山田孝雄 190 宝文館)・角川文庫『方丈記―付 現代語訳』(訳注者・築瀬一雄 197 角川書店)

ii 『華嚴経』の偈に言い習わすとするもの。

『方丈記・土佐日記・十六夜日記新釈』(著作者・

竹野長次 194 敬文堂)・『新註校訂方丈記』(編者・鈴木知太郎 193 武蔵野書院)

iii 『華嚴経』の教義によって作られたものとするもの。

紫文学評註叢書『評註 方丈記全解』(著者・新聞

進一 194 紫乃故郷舎)・分野別高校古典学習シリーズ

『随筆・評論』下(著者・武石彰夫 195 三省堂)・「方

丈記」注解』(197 『仏教文学の周辺』大東文化大学附属

東洋研究所)に収載)・「方丈記」(三木紀人 193 研究

資料日本古典文学『随筆文学』明治書院)

iv 『華嚴経』の偈とするもの。

『方丈記―注解と文体研究―』(著者・菅原真静 195

秀英出版)

v 『華嚴経』の語を合成した偈とするもの。

対訳古典シリーズ『方丈記 付 発心集(抄)』(訳

注者・今成元昭 198 旺文社)

V、「三界所有、唯是一心、」を指摘するもの

i 八十卷『華嚴経』とするもの。

『新釈方丈記精解』(III・ii参照)。

ii 八十卷『華嚴経』十地品とするもの。

『方丈記』(IV・i参照)・『新註校訂方丈記』(IV・

ii参照)。

iii 『華嚴経』夜摩天宮品とするもの。

紫文学評註叢書『評註 方丈記全解』(IV・iii参  
照)。

iv 『華嚴経』とするもの。

解釈文法シリーズ『方丈記の解釈と文法』(III・iii

参照)・『新註 方丈記全釈』(著者・土田知雄 195

武蔵野書院)・日本古典鑑賞講座『徒然草・方丈記』

(III・ii参照)・分野別高校古典学習シリーズ『随筆・

評論』下(IV・iii参照)。

v 『華嚴経』十地品とするもの。

『方丈記―注解と文体研究―』(IV・iv参照)。

vi 仏書とするもの。

『語法詳解 方丈記の新解釈』(著作者・浅尾芳之助

1956 有精堂)

VI、「三界虚妄但一心作」を指摘するもの

『華嚴経』の十地品とするもの。

『解釈と評論 方丈記』(II・ii参照)・「方丈記考

―その無常観をめぐって―』(関口忠男 197 1 『日本

文学研究』・『中世文学序考』（1902 武蔵野書院）に収載。）

## B群

I、「観心略要集」（伝源信）の「三界唯心心外無」別法<sup>二</sup>（心仏及衆生是三無差別<sup>三</sup>）を指摘するもの

「方丈記の正しい解釈のために―校異・訓み・評釈の諸説批判―」（田中裕 1973 「解釈と鑑賞」・鑑賞日本古典文学『方丈記・徒然草』（著者・富倉徳次郎・貴志正造 1970 角川書店）・講談社学術文庫『方丈記』（全訳注・安良岡康作 1980 講談社）・『方丈記・その思想と文体―作品全文を掲げて―』（三木紀人編 1980 9 「国文学」）

II、「自行略記」（第五）の「三界唯一心、心外無別法」（第五 五九七頁）を指摘するもの

「三界唯一心（方丈記注解 九）」（神田秀夫 1965 1 「解釈と鑑賞」）

III、「本理大綱集」（伝最澄）の「三界唯心心外無」別法<sup>二</sup>（<sup>7</sup>）を指摘するもの

講談社学術文庫『方丈記』（B群・I参照。）

IV、「修禅決」（伝最澄）の「三界唯一心、々外無別法、心仏及衆生、是三無別法<sup>8</sup>」を指摘するもの

講談社学術文庫『方丈記』（B群・I参照。）

先ず、A群について見て行きたい。Iのアテネ文庫『方丈

記』には「三界只一心という偈を引いて」とあり、詳細が不明である。「三界只一心」という文言は、大正新脩大藏經に見出すことはできず、「三界唯一心」のことだとすればIIに分類される。

IIの「三界唯一心」は、先に述べた如く『華嚴經』には見出せない。よって、『華嚴經』を典とするi、ii、viiは誤りである。大正新脩大藏經を見るに、「三界唯一心」という文言を有する經典は、

爾時世尊欲重宣此義。而説偈言  
(中略) 是知三界唯一心

心有大力。世界生 自在能為变化主<sup>二</sup>

悪想善心更造集 過現未來生死因

依止妄業。有世間。愛非愛果恒相統(以下、略)

と記す『心地観經』(3・328a)のみである。

IIIの「三界唯一心 心外無別法」も、『華嚴經』に見出すことはできず、i、iiiは誤りとなる。iiの指摘する「十地論」とは十地經の注釈書である『十地經論』<sup>10</sup>のことであろうか。『十地經論』には十地經の全文が引用されているが、この文言はなく、誤りとなる。viの「華嚴のいわゆる」は、『華嚴經』指すのか華嚴宗を指すのかが明瞭ではなく、vの『方丈記新考』は出典を記していない。

IVの「三界唯一心 心外無別法」心仏及衆生 是三無差別<sup>二</sup>(如心偈)も『華嚴經』には見出せず、i、ivは誤り

となる。管見によれば、『方丈記』研究においてこの句が『華嚴經』に見えないことを指摘したのは、iiの『方丈記・土佐日記・十六夜日記新釈』が早い。

以上が古注の指摘する三種類の文言についてのものであるが、他の出典も指摘されている。Vの「三界所有、唯是一心」は、『織田仏教大辞典』が指摘する如く、八十卷本『華嚴經』（十地品）に「仏子。此菩薩摩訶薩。復作是念。三界所有。唯是一心。如來於此。分別演說十二有支。皆依一心。如是而立。」(10・194a)と見える。V・iiiの『華嚴經』夜摩天宮品は、六十卷本『華嚴經』の仏昇夜摩天宮自在品のことであろうか。同品にはこの文言はないが、如來林菩薩の偈(9・467a)として

心如<sub>レ</sub>三<sub>二</sub>画師<sub>一</sub> 画<sub>二</sub>種種<sub>一</sub>五陰<sub>一</sub>

一切世界中 無<sub>レ</sub>法而不<sub>レ</sub>造

如<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>仏亦爾 如<sub>レ</sub>仏<sub>レ</sub>衆生然

心<sub>レ</sub>仏及衆生 是<sub>三</sub>無<sub>二</sub>差別<sub>一</sub> (以下略)

を見出すことができる。これは、唯心偈と称されるものである。

VIの「三界虚妄但一心作」という文言も、『華嚴經』には見出せない。これは『大方広仏華嚴經疏演義鈔』(36・525b)などに見える文言であり、『十地經論』などには「三界虚妄但是一心作」(26・169a, 170c)とある。解釈文法シリーズ『方丈記の解釈と文法』、日本古典鑑賞講座『徒然草・方丈

記』、紫文学評註叢書『評註 方丈記全解』、『方丈記―注解と文体研究―』、『方丈記』、『新註校訂方丈記』、『解釈と評論 方丈記』、『方丈記考―その無常観をめぐって―』は、「三界八只心一ツナリ」と同様の思想が『華嚴經』に見えることを指摘したものである。分野別高校古典学習シリーズ『随筆・評論』下、『新註 方丈記全釈』、『新釈方丈記精解』は如心偈を記すが、『方丈記』の「三界八只心一ナリ」の出典と明記しているわけではない。

次にB群について見る。B群は、如心偈の出典について我が国の論書を挙げるものである。『自行略記』は出典を示さず。他の三書は「華嚴云」とする。この中では、鑑賞日本古典文学『方丈記・徒然草』(二二六頁)のみが作者の直接依ったものとして『観心略要集』を挙げる。

以上、A群のI～IV及びVIの文言は『華嚴經』には見出すことはできない。Vの文言のみを八十卷本『華嚴經』に見出すことができた。B群では、鑑賞日本古典文学『方丈記・徒然草』以外は、『方丈記』の文言の出典と言うよりも、如心偈の用例の指摘に留まっていると言えよう。

## 二、「三界唯一心」の出典について

前章で見た如く、古注の指摘する文言は『華嚴經』には見出せなかった。この誤謬は、『華嚴經』を見ていないために

生じたものと思われる。本章では大正新脩大藏經に収載されている論書を取り上げ、前章A群に記した文言の出典について見てゆく(Ⅰの「三界只一心」は、Ⅱの「三界唯一心」の誤写として扱う)。

Ⅱ、「三界唯一心」(大字は、日本のもの。以下、同。成立年は、『大藏經全解説大事典』を参考とした。)

iv 「大乘起信論」	①僧侶	『方丈記』成立以降	『方丈記』成立以降	ii 「心地觀經」	①真言宗	『法苑義鏡』(71・232a・善珠・79以前)	『大日經疏妙印鈔』(58・154c・有範・130)
					②時宗		
iii 「地論」云	③法眼宗	『宗鏡錄』(48・873) a・延寿・961	『方丈記』成立以前	i ナシ	①法相宗	『法苑義鏡』(71・232a・善珠・79以前)	『大日經疏妙印鈔』(58・154c・有範・130)
	②華嚴宗				『真言宗教時義』(75・40b・安然・910c)		

『大乘起信論略述』(85・100b・唐代・曇曠)・『大乘起信論広釈』(85・105b・前同)

v 「華嚴經」	①華嚴宗	『華嚴五教章見聞鈔』(73・133a・137) a・靈波・134
	②浄土宗	

この中で「三界唯一心」の文言が記されている『心地觀經』を出典とするものは、『大日經疏妙印鈔』のみである。「三界唯一心」という文言を『華嚴經』からの引用とするものは、時代が下がるとは言え華嚴宗の書物である。更に、『大乘起信論義記』、『宗鏡錄』、『大乘起信論略述』、『大乘起信論広釈』の四冊は中国で著述されたものであり、中でも『大乘起信論義記』が「三界唯一心」の出典を「地論云」としていることは興味深い。先に「地論は『十地經論』のことであろうか」と記したが、『十地經論』を研究対象とする学派を地論宗と称する。『大乘起信論義記』の「地論云」とは、書名ではなく地論宗のことを指しているのではなからうか。華嚴宗は、この地論宗の系統から出る宗派である。『大乘起信論義記』の著者の法蔵は華嚴宗の第三祖で華嚴經学の大成者であり、『十地經論』に「三界唯一心」という文言がないことは知っていたであろう。法蔵が地論宗の意味で使用した「地

論云」という文言を、書名の『十地經論』と解した者がいたのではなからうか。その者は、法蔵が『十地經論』を出典として記しているのだから『華嚴經』にもこの文言が記されていると思つた、とは考えられまいか。以上のことが言えるのならば、『大乘起信論義記』の「地論云」という記述が、「三界唯一心」の出典を『華嚴經』とすることに関与している可能性が出て来よう。

次にⅢ、Ⅳについて見る。

Ⅲ、「三界唯一心 心外無別法」

i ナシ		出典
③真言宗	②天台宗	①法相宗
	『菩提心論見聞』(70・52 a・不明・?)	『彌勒講式』(84・888 a・貞慶・123以前)
	『大日經疏演奥鈔』(59・269 a・果宝・第十六品以降は江戸時代成立)・『行法肝葉鈔』(78・884 b・道範・124)・『十八道口決』(79・68 a・頼揄・126)	『方丈記』成立以前
	『溪嵐拾葉集』(76・719 b・光宗・134以前)	『方丈記』成立以降

v 「五供 合伽陀 云」	iv 「五供 養伽陀 云」	iii 「菩提 心義」	ii 「華嚴 經」	
①天台宗	①天台宗	①天台宗	①天台宗	④臨濟宗
		『胎藏金剛菩提心義略問答鈔』(75・494 c・安然・9) 10 C)・『三密抄料簡』(75・641 b・覺超・10) 11 C) 『行林抄』(76・339 b・靜然・134)	『胎藏金剛菩提心義略問答鈔』(75・540 c・安然・9) 10 C)	
『溪嵐拾葉集』(76・758 c・光宗・134以前)	『溪嵐拾葉集』(76・706 b・709 c・光宗・134以前)		『觀經疏伝通記』(57・648 c・良忠・123)・『選択伝弘決疑鈔』(83・46 c・良忠・127以前)	『鹽山拔隊和尚語錄』(80・591 a・不明・137頃)・『絶海和尚語錄』(80・737 a・不明・143以降)・『大通禪師語錄』(81・58 b・古溪・173)



vii 「鈔云」	①曹洞宗		『禪戒鈔』(82・648) c・万俣道坦・175b
vi 「安然 和尚云」	①真言宗		『悉曇略図抄』 (84・707c・了尊・1207)

IV、「三界唯一心 心外無別法」 心仏及衆生 是三無

差別」(如心偈)

ii 「華嚴 經」	②天台宗	①胎藏金剛菩提心 義略問答鈔』(75・ 487b・540c・安然・ 9)・10C)	
	①法相宗		『觀心覺夢鈔』 (71・85c・良遍・123) 以前
	③曹洞宗	『禪戒鈔』(82・651) c・万俣道坦・175b	『正法眼蔵』(82・ 178a・道元・123) 『禪戒鈔』(82・651) c・万俣道坦・175b
	②天台宗	『法華長講會式』 (74・247a・最澄・ 812)	『法華長講會式』 (74・247a・最澄・ 812)
	宗派	『方丈記』成立以前	『方丈記』成立以降

v 「文云」	①天台宗		『溪嵐拾葉集』 (76・701b・光宗・136) 以前
iv 「大日 經」	①真言宗		『大日經疏妙印鈔』 (58・137b・有範・ 1330)
iii 「華嚴 經」の偈	①真言宗	『大日經住心品疏 私記』(58・75a・ 清暹・115以前)	
	③真言宗	『般若心經秘鍵開門 訣』(57・42a・清 暹・107)	

「三界唯一心 心外無別法」及び如心偈が記されている論書は、総て日本で著述されたものである。これは、如心偈が日本で考案されたものであり、「三界唯一心 心外無別法」の二句は如心偈の後半部を省略したものであることを意味しているのではあるまいか。また、出典を『華嚴経』とするものは法相宗、天台宗、真言宗の論書であり、華嚴宗のものはない。これは、華嚴宗では如心偈が『華嚴経』に存在しないことが周知されていたためであろうが、この偈によって示される思想が華嚴宗のものとは異なっていたためとも考えられよう。

大正新脩大蔵経に見える如心偈の用例としては、「法華長講會式」(上巻冒頭)のものが最も古いが出典は記されてい

ない。『大藏経全解説大事典』によれば、「法華長講会式」は大同五年（八一〇）に始修せられた法華長講会の際に、最澄によって記された発願文とのことであるが、『日本仏教典籍大事典』には「一部後年『延喜式』神名に対応し、偽撰部分もある。」<sup>12</sup>とある。問題の箇所は『延喜式』の神名に対応しているわけではないが、「法華長講会式」に後人の手が加わっていることを考えれば、如心偈も後人の手によるものではないか。次に古いものは安然の『胎藏金剛菩提心義略問答鈔』で、こちらも天台宗の論書であるが、出典を『華嚴経』とする。天台密教の大成者たる安然が『華嚴経』を見ていないとは考えづらく、極めて不審である。

天台宗の書物に、『華嚴経』を出典とする文言が見えることは不思議なことではない。天台の一念三千の思想は、開祖智顛が『華嚴経』の思想より作り上げたものである。智顛の寂滅後、天台教学は弟子達によって発展、展開してゆく。第六祖の荆溪大師湛然と華嚴宗の第四祖清凉澄観とは論争を繰り返しながら、互いの宗派の思想、用語を取り込んだ。湛然の孫弟子に当たるのが、日本天台の祖最澄である。最澄の説く教学は、渡唐以前に華嚴宗の教義を学んでいたこともあったか、天台だけでなく華嚴教学をも取り込んだものであった。但し、最澄の師である道邃と行滿が湛然以上に天台円頓止観の思想を確立しようとしたことから考え、生起説や禅を取り入れた中国天台の山外派ほど華嚴宗寄りではなかったものと思

われる。<sup>13</sup> 以上のことより、日本天台には、『華嚴経』の文言を出典として如心偈を考案する下地は十分にあったと言える。如心偈の考案者として、安良岡康作氏は、「あるいは、恵心流の天台学匠の間から考案された偈といえるかもしれない。」〔講談社学術文庫『方丈記』（B群・I参照。）二〇四頁・二〇五頁〕と推定する。『恵心僧都全集』には、『自行念仏問答』（第一一五三四頁。出典を『華嚴経』とする。）と『妙行心要集』（第二一四二九頁。出典、ナシ。）に「三界唯一心」が、『阿弥陀経略記』（第一一四一五頁。出典、ナシ。）には「三界唯心心外無別法」<sup>14</sup>が見える。また伝最澄の『本覚讀辞』には、「心仏及衆生 是三無差別」<sup>15</sup>が二例記されている（出典を『華嚴経』とする）。以上のことより、如心偈は『華嚴経』を出典とする文言を中心に天台の学匠達の手で撰って考案されたものであり、最澄や源信などに仮託されたものである可能性が高いと推察する。作者は『観心略要集』などの論書を参考として、「三界八只心一ツナリ」という言葉を記したのである。

### 三、「三界八只心一ツナリ」について

天台の学匠達が天台の書物によって如心偈を学ぶのならば、その解釈は当然天台宗の教理に従ったものとなる。天台宗と華嚴宗との教義の違いの一つとして、天台の性具説と

華嚴の性起説がある。この違いについて鎌田茂雄氏は、

天台では迷える凡夫がほとけのいのちとしての靈性を具有していると説き、華嚴では凡夫は本来的立場でいえば、もともとほとけのいのちから出てきたものと説く。

天台は「具」の一字、華嚴は「起」の一字で表わされる。個物は普遍的なほとけのいのちを本具するとみるのが天台、あらゆるものは普遍的なほとけのいのちの表現活動とみるのは華嚴である。天台は凡夫の立場からほとけのいのちをみ、華嚴はブツダの立場から凡夫をながめるのである。<sup>16</sup>

と解説する。凡夫は元々仏性を具有していると解するのが天台で、諸法は仏性より起出した果と解するのが華嚴と言うこととなるのか。『仏教学辞典』（「唯心」の項）は

旧訳の華嚴經卷十夜摩天宮菩薩偈品の如来林菩薩の偈には、「心はたくみな画師のようで種々な五陰を画く。一切世界の中で一つとして心が造らぬものとしてない。心のように仏もそうであり、仏のように衆生もそうである。心と仏と衆生との三法は全く区別すべきでない」と心仏及是三無差別を説く。これを、華嚴宗では心を能造（造る者）、仏・衆生を所造（造られるもの）と見て、如来藏心が悟るのを仏、迷うのを衆生とし、縁起には染淨（けがれたときよらかなのと）の別があつても心それ自体は同じものであるから三法無差であるとするのに対

して、天台宗山家派では心・仏・衆生の三法は共に同一の三千の法であるから心のみが能造・能具（具有する者）でなくて、仏・衆生も能造・能具であり、また仏・衆生のみが所造・所具（具有せられるもの）ではなくて、心も亦所造所具であるとして三法無差を説く。但し天台宗山外派では心を能造、仏・衆生を所造とする異説を主張する。なお、法相宗ではこれを唯識無境の意味と解し、また真言宗では仏と衆生との三密が平等であることの証文とする。<sup>17</sup>

と記す。華嚴宗では、造る者は心であり造られるものは仏と衆生であるが、天台宗では、心、仏、衆生の三つがそれぞれ造る者と造られるものとなる。唯一心は、唯一仏であり、唯一衆生と言えよう。両宗の違いは、如心偈を出典とする『方丈記』の「三界八只心一ツナリ」の語釈や口語訳にも及ぶのではなからうか。作者の戒師が洛北大原の来迎院四世長老の明定上人蓮契と考えられることと、法友の禅寂（俗名・日野長親）が来迎院の五世長老となったことなどから、作者は如心偈を天台流に解釈していたのだろう。少なくとも、「三界八只心一ツナリ。」を「三界は心性から起出したものである。」というような華嚴宗的な解釈はしていなかったものと考ええる。「三界八只心一ツナリ。」を直訳すれば、「三界はただ心と同一である。」となるか。解釈においては、自己の心と仏と衆生が同一であるとする、天台的な解釈が根底にあ

ることを明記すべきであろう。

#### 四、後半部まとめについて

作品の流れ及び段落末の「閑居ノ気味モ又同ジ。住マズシテ誰カ悟ラム。」から考えるに、主人公が後半部まとめで主張したいことは方丈の庵の正当性であろう。具体的には、方丈の庵は修行環境という点で都に代表される俗世よりも上位にあるということになる。「心若安カラズバ、象馬七珍モヨシナク、宮殿樓閣モ望ミナシ。」とあることから、方丈の庵を俗世よりも上位に置くための基準となるものは心の安定状況である。心が安定しているということは偏りが無いということであり、執着心がない状況と言えよう。方丈の庵は心の安定が得られる場所である。俗世の如く宝物や豪邸を望むというような物欲に捕らわれることなく、修行が行なえる場所ということとなる。この主張は、方丈の庵が心の安定が得られる場所ということを前提としたものである。即ち、仏道修行の成果にかかわりなく、庵は心の安定が得られる場所ということになる。これは、前半部最後に記された「イヅレノ所ヲ占メテ、イカナル業ヲシテカ、暫シモ此ノ身ヲ宿シ、タマユラモ心ヲ休ムベキ。」と矛盾するのではなからうか。心の安定を得るといふ目的のための方法が、仏道修行だったはずである。方丈の庵は、目的成就のために必要な環境であ

った。後半部まとめでは、仏道修行の結果として得られるはずの心の安定が、方丈の庵へ移住した段階で得られていることになるのではあるまいか。この点を含め、後半部まとめにおける主人公の主張には、論理の綻びが見受けられる。

作者が如心偈を天台流に解釈していたことは、間違いないものと考ええる。この作者の知識は、後半部まとめにおける主人公の主張に活かされてはいない。「三界ハ只心一ツナリ。」は、主人公の主張の根拠にはなっていないのである。三界とは欲界・色界・無色界のことであるが、ここでは、生活環境、修行環境という意味に限定されて使用されている。主人公の主張とは、自身の心が安定しているから、この閑居たる方丈の庵は修行の場として正当と言える、となる。ここに、如心偈の有する性具説の思想は見出せない。「三界ハ只心一ツナリ。」は、本来の天台教学に基づいて使用されてはいないと言えよう。

先に述べた如く、天台宗は仏法、衆生法、心法の三法の同一性を説く。故に、三法の同一性を述べれば、庵の修行環境の正当性は証明されるはずである。同一のものを比較しても、その優劣を判定することはできないからである。修行環境の優劣を述べようとする主人公は、相対的思考法に捕らわれている。このことから、主人公は如心偈の思想を体得してはいなかったと言えよう。体得していれば、「自ツカラ都ニ出デ、身ノ乞匄トナレル事ヲ恥ヅトイヘドモ、帰リテ愛

二居ル時ハ、他ノ俗塵ニ馳スル事ヲ憐レム。」などと云うこととはない。これは庵の正当性を述べようとしたものであろうが、環境によって心が揺れ動いていることの表明ともなっている。主人公の心は、「安カラズ」という状況にあると言える。この時点で、主人公は如心偈の思想を体得していないことに気付いたのだろう。気付いた故に、「今、寂シキ住ヒ、一間ノ庵、自ラコレヲ愛ス。」と述べたのではないか。これは、方丈の庵の正当性を主張するための新たな根拠と言えよう。心の安定ではなく、自己の満足度を基準としたのである。庵の正当性の基準を変更することによって、庵と俗世の比較は回避された。問題は、「自ラコレヲ愛ス。」が方丈の庵の生活に対する主人公の心の偏りを表わしていることである。「自ラコレヲ愛ス。」とは、庵の生活への執着心の表出に他ならない。ここに至って、後半部で隠約していた主人公の庵に対する執着心は顕現する。

『方丈記』前半部の最後に「タムユラモ心ヲ休ムベキ。」とあることより、後半部の生活は「心ヲ休」めるためのものがあった。「自ラコレヲ愛ス。」という心の偏りの表出は、執着心が解消されておらず、「心ヲ休」めてはいないことを示している。「若、人コノ言ヘル事ヲ疑ハミ、」で始まる魚と鳥との譬喩は、強弁と言えよう。魚と鳥との譬喩が「自ラコレヲ愛ス。」を受けている以上、鳥は林に、魚は水に執着していることとなる。これは、仏道修行の成果が得られていないこ

とを意味している。方丈の庵での仏道修行は、『摩訶止観』に記された五縁具足に準拠したものであった<sup>20</sup>。五縁具足には、修行環境を整えることの重要性が説かれているが、五縁を具足することは、修行の成果を保証するものではない。修行の成果を得られていないことと、その原因が庵の生活への執着心にあることに気付いた主人公にとって、庵の生活の正当性を述べるには他に方法はなかった。それ故、後半部まじめを締め括るために、このような強弁に頼り、「住マズシテ誰カ悟ラム」と言わざるを得なかったものと考ええる。「三界ハ只心一ツナリ。」と述べた時点で、主人公の庵の正当化は失敗していたと言えよう。

『方丈記』は、後半部のまじめに到って「三界ハ只心一ツナリ。」と述べたことにより、それまで隠約していた主人公の庵に対する執着心が顕現する<sup>21</sup>。この後、自己の執着心に気付いた主人公は、終章で懺悔を行なうこととなる。この懺悔は、後半部まじめで顕現した執着心を捨棄するために、凡夫たる主人公が当然なさねばならぬものであった。後半部まじめにおいて執着心が顕現しなければ、終章における懺悔は必要なかったはずである。執着を有していることに気付かないまま形式的な懺悔を修しても、効果が生ずることはないだろう。それ故に、後半部まじめにおいて主人公が自己の執着に気付くことは、懺悔を修する上で重要な過程であった。因つて、「三界ハ只心一ツナリ。」とは、仏道修行者たる主人公の

有する執着心を顕現させるために作者の用意した文言だったものと推察する。終章の「仏ノ教へ給フ趣ハ、事ニ触レテ執心ナカレトナリ。」の「執心」とは、直接的には後半部まとめて顕現した執着心を指していることとなろう。

おわりに

『方丈記』の後半部まとめは、「夫、三界ハ只心一ツナリ。」という文言で始まる。これは、方丈の庵の正当性を述べるための根拠と見られている。この文言の出典については、『方丈記調説』が「三界唯一心 心外無<sup>三</sup>別法」、心仏及衆生是三無<sup>三</sup>差別<sup>二</sup>」（如心偈）を指摘し、『華嚴經』を出典として提示した。『華嚴經』にこの文言が見えないことは、大正五年に出版された『織田仏教大辞典』が指摘している。大正新修大藏經を見るに、「三界唯一心」という文言を有する経典は『心地観經』のみである。

論書に目を移すと、『大日経疏妙印鈔』のみが「三界唯一心」という文言の出典を『心地観經』と正しく表示する。華嚴宗の法蔵の『大乘起信論義記』は、「地論云」とする。この記述が「三界唯一心」の出典を『華嚴經』とすることに關与している可能性はあろう。如心偈と「三界唯一心 心外無<sup>三</sup>別法」の二句を指摘する論書は、総て日本のものである。これは、如心偈が日本で考案されたものであり、「三界唯一

心 心外無<sup>三</sup>別法<sup>二</sup>」が如心偈の後半の二句を省略したものであることを示すものと考ええる。また、華嚴宗の論書に見えないのは、如心偈が『華嚴經』に存在しないことが周知されているからであろうが、その思想が華嚴宗とは異なるものであったからだろう。如心偈は天台の学匠達によって考案されたものとするのが妥当ではないか。作者は『観心略要集』などを参考とし、「三界ハ只心一ツナリ」と記したものと考ええる。

天台の学匠達は、如心偈を天台の教義に従って解釈をしたのだろう。天台では、仏法、衆生法、心法の三つを同一のものとする。心が能造、他の二つが所造と見るのではなく、三つすべてが能造と所造の関係を有していることとなる。

『方丈記』主人公にとって、如心偈は知識でしかなく、その内容を体得してはいなかった。体得していたとすれば、環境によって心が揺れ動くはずがない。故に「三界ハ只心一ツナリ」は、修行の場としての庵を俗世よりも上位に置くための根拠として使用されているに過ぎない。「自ら是ヲ愛ス」とは、庵への執着の表出であり、主人公はそのことに気付いていた。気付いていたからこそ、「若、人コノイ言ヘル事ヲ疑ハ、（ ）」以下の強弁を用い、「住マズシテ誰カ悟ラム。」と言わざるを得なかったのである。『方丈記』は、後半部まとめて顕現した主人公の庵への執着の問題を受け、終章においてその解決法が提示されることとなる。如心偈を出典とした「三界ハ只心一ツナリ。」は、凡夫たる主人公の抱く修行

環境への執着心を顕現させるために、作者の用意した文言だったと考える。

注

- 1 『方丈記』の引用は、大福光寺本『方丈記』（校異・鈴木知太郎 199 武蔵野書店）に拠り、適宜、句読点、濁点を付し、仮名を漢字に改めた。
- 2 『鴨長明方丈記抄』（著者・加藤磐斎 160以前）は、加藤磐斎古注集成『長明方丈記抄・徒然草抄』（編修者・有吉保 196 新典社）に拠り、『首書鴨長明方丈記』（著者・山岡元隣 167）、『方丈記調説』（著者・大和田気求 168）、『鴨長明方丈記詳解』（著者・不明 171）、『方丈記流水抄』（著者・槇島昭武 176）、『方丈記宜春抄』（著者・仁木宜春 196）は、『方丈記諸注集成』（編者・築瀬一雄 199 豊島書房）に拠る。
- 3 四十巻本と六十巻本の『華嚴経』は『大方広仏華嚴経』（大正新脩大蔵経）第九巻 190 大正新脩大蔵経刊行会）に、八十巻本『華嚴経』は『大方広仏華嚴経』（大正新脩大蔵経）第十巻 197 大正新脩大蔵経刊行会）に拠った。  
以降、仏典は特に注を付さない限り大正新脩大蔵経に拠る。  
「3・328a」は、「第三巻・三二八頁上」を示す。
- 4 著者・織田得能 196 大蔵出版。
- 5 今成元昭氏（鴨長明——方丈記を中心に——）「中世文学」195 9 二二頁）、築瀬一雄氏（古典を読む——方丈記」1981 大修館書店 一一八頁）なども、同様の立場を採る。
- 6 『観心略要集』の引用は、『観心略要集』（編纂・比叡山専修学院・叡山学院『恵心僧都全集』第一 197 比叡山図書刊行

所 二七九頁）に拠る。他の『恵心僧都全集』の出版年は、第二と第三が197、第四と第五が197である。

- 7 『本理大綱集』の引用は、『本理大綱集』（校注者・多田厚隆・大久保良順・田村芳朗・浅井円道 日本思想大系『天台本覚論』193 岩波書店 三二四頁上）に拠る。

- 8 『修禅決』の引用は、『修禅寺相伝私記』（日本思想大系『天台本覚論』（注7参照）三三一頁下）に拠る。

- 9 「十地経」は、四十巻本と六十巻本『華嚴経』の十地品の元になった經典である。

- 『大蔵経全解説大辞典』（編者・鎌田茂雄・河村孝照・長尾良信・福田亮成・吉本信行 199 雄山閣出版）を見るに、「十地経」と称されるものには『菩薩十住行道品』（訳者・竺法護）、『仏説菩薩十住経』（訳者・祇多蜜）、『漸備一切智徳経』（訳者・竺法護）、『十住経』（訳者・鳩摩羅什・仏陀耶舎）、『仏説十地経』（訳者・尸羅達磨）などがある。

- 10 『大蔵経全解説大辞典』（注9参照）「十地経論」の項によれば、「十地経ともいう。【成立】五世紀頃。著者は世親（ヴァスバンドウ）。【内容】十二巻。十地経（華嚴経 078・079十地品）を注釈したもの。（以下略）」とある。

- 11 『岩波仏教辞典』（編者・中村元・福永光司・田村芳朗・今野達 199 岩波書店「地論宗」の項）に拠る。

- 12 代表委員・金岡秀友・奈良康明・藤井正雄・渡辺宝陽 196 雄山閣出版。

- 13 この部分は、『鎌倉新仏教思想の研究』（著者・田村芳朗 196 平楽寺書店 七六頁—七八頁）、『天台学 根本思想とその展開』（著者・安藤俊雄 196 平楽寺書店 一五二頁、三二九頁

（三三四頁）、『岩波仏教辞典』〔「最澄」の項、「山家・山外」の項。（注11参照。）〕、角川ソフィア文庫『絶対の真理（天台）』（田村芳朗・梅原猛 19% 角川書店 四二頁・五〇頁・五一頁）、等を参考とした。

14 『恵心僧都全集』には、類似の表現として「横川楞嚴院二十五三昧起請」に「善惡唯一心。心外無別法」〔第一 三五一頁〕が、「真如觀」に「威通二教ノ心ハ。心ガ外ニ別ノ心性ト云フ物無シ。」〔第一 四八四頁〕と「心如工画師」。造種種々五陰一切世界中。無法而不造（同 四九〇頁）が、『六即詮要記』（第三 二七九頁）に「三界無別法」。唯是一心作。』が、『時教畧偈』（第三 二九九頁）に「心造三如来三界心」が、『教觀大綱』（第三 五三二頁）に「純一実相。実相外。更無別法。』が、『咒願』（第四 五六二頁）に如心偈が、『自行略記』（第五 五九七頁）に如心偈と「心仏衆生無有差別」〔第五 六〇〇頁〕が見える。

15 『本覚讀辞』の引用は、『本覚讀辞』（日本思想大系『天台本覚論（注7参照。） 三五四頁上』）に拠る。

また、日本思想大系『天台本覚論』所収の『真如觀』（伝源信 一四〇頁）には、

抑生死界モ、心ガ作ル也トハ、何ニガ衆生界ヲ作、何ニガ仏界ヲ作レリト尋レバ、本是一実真如理ニシテ、地獄・鬼畜等ノ九界ノ差別ハナシトイヘ共、流来生死ノ始、無明ノネムリ一度発ヨリ、

が『三十四箇事書』（伝源信）には「三者者、我等衆生一念心也、故諸識外無但一心也、一心外無只諸識也、又三身外無但一心也、」（三六〇頁）、「心外無諸法々々外無心」（三六三頁）、

「円教意、転衆生成仏身不云也、衆生乍衆生仏界乍仏界俱常住覚也、全無取捨故無増減也」（三六五頁）が、『修禪法』には「一切諸法本是仏法更非心外」（三四五頁下）が、『漢光類聚』（伝忠尋）には「故山家大師依止觀本未給時一心為本立十境十乘、十境十乘即一心也、一心外別内証不可有之、」（三七三頁）と「得意三諦者假教門三諦相得意能思惟觀察只是行者一心所具也、心外全無有異了達是得意三諦也、」（三九〇頁）が見える。

16 角川ソフィア文庫『無限の世界観（華嚴）』（著者・鎌田茂雄・上山春平 19% 角川書店 一七七頁）。

17 編集者・多屋頼利・横超慧日・舟橋一哉 19% 法蔵館。

18 「秘曲尽くし事件の起きた時期——長明大原在任期の可能性——」（今村みゑ子「説話文学研究」19% 6 三四頁・研究叢書『鴨長明とその周辺』（20% 和泉書院）に収載。）。

19 「両院僧坊歴代記」（『続天台宗全書』19% 春秋社 五一五頁）と『國史大系』『尊卑分脈』第二篇（19% 吉川弘文館）に拠る。

20 拙稿「『方丈記』にみる修行環境に関する一考察——「五縁具足」との関連から——」（『仏教文学』19% 3・『方丈記私論』（20% 武蔵野書院）に収載。）を参照されたい。

21 主人公が庵に対する自己の執着に気付くという構図は、前半部の煩惱が顕現する非日常と隠約する日常という形式を受けたものと考える。拙稿「『方丈記』前半部試論——「世ノ不思議」を中心として——」（『日本文学研究』20% 4・『方丈記試論』（注20参照。）に収載。）を参照されたい。